

[特集]防災と安全

必ず出会う震災から子どもたちの命を守る

福和 伸夫

1. 現代社会の災害脆弱度と学校の役割

我が国は、アジアモンスーン地帯のプレート境界に位置するため、過去から地震・火山噴火や風水害など、様々な災害に見舞われてきた。地震・雷・火事・親父と呼ばれるように、怖いものの代名詞としても、地震や風水害が挙げられている(親父は、台風を意味する大山嵐・おおよまじが変化したという説もある)。このため、自然と対峙せず、危険を避けて、自然と折り合いをつける独特な日本文化を育んできた。かつての集落は、災害危険度の低い台地や丘陵地の麓に位置し、板葺きや藁葺きの木造の平屋住宅を建て、わき水を利用して低地で田を耕し、薪で火をおこし、海や山の幸を採りながら、互いに助け合いながら生活を営んできた。地域や家庭の中で、子どもたちに、過去の災害教訓や生きる知恵を伝えることで、千数百年の歴史を繋いできた。

一方、現代社会は、都市に人が集中し、まちを災害危険度の高い沖積低地や山の斜面に拡大して、家屋を密集化・高層化し、電気、ガス、上下水道などのライフラインに頼った生活へと変貌し、災害に脆くなっている。しかし、コンクリートやアスファルトに覆われた人工環境にいるため、小さな災害に出会うことが減り、自然の怖さを感じるようになった。また、隣近所との人間関係も希薄になり地域の力も弱まった。少子化で家族の構成員が減り、自然の中で体を動かして遊ぶことも減ったため、子どもたちの心身の力も落ちているように思われる。

子どもたちの親や教師の多くは、大きな自然災害や戦争を経験していない世代である。困難な時代を経験した戦前世代の話聞く機会が少なくなったため、子どもたちに災害の怖さを伝えることができていない。地震の活動期や気候温暖化の時代を迎える中、我が国は1,000兆円にも及ぶ債務を抱え、少子高齢化による人口減など、多くの困難に直面している。今や、国民一人当たりの国内総生産(GDP)は世界24位にまで低下した。こういった困難を克服するには、人間や社会の「生きる力」をつけるしかない。自らの命は自ら守る「自助」と、互いに助け合う「共助」の力である。

学校や教員ができることは多い。本来、学校で学ぶ教科学習は、人生を生き抜くための知恵を体系化したものである。例えば、地震を例にすれば、基本となる「ひと」「こと」「もの」「ば」づくりを、保健体育、理科、技術・家庭科、社会科に対応させ、各教科学習の中で、救命救急、地震や揺れのメカニズム、耐震化・家具固定・非常用品・備蓄品・災害食、地域の歴史や地域危険度調査、などを学び、総合学習の場でこれらをつなぎ合わせられると良い。

学校は、地域の人たちにとって最も身近な場であり、地域の核になりやすい。学校が声かけ役となり、子どもたちが家庭や地域社会での防災学習や減災行動を誘発し、地域社会の「生きる力」を育んでいきたい。

フクワ ノブオ

名古屋大学減災連携研究センター長・教授。

専門は建築耐震工学，地震防災。

1957年名古屋生まれ。1981年名古屋大学大学院工学研究科修了後、清水建設を経て、名古屋大学工学部助教授、先端技術共同研究センター教授、環境学研究科教授を経て現職。文部科学大臣表彰科学技術賞、防災担当大臣表彰防災功労者、日本建築学会賞などを受賞。教育・研究の傍ら、国や自治体の防災施策や地域の防災活動を実践。



2. 地震災害を克服する3つの秘訣

災害を克服する要点は、「危険の回避」，「災害に対する抵抗力」，「災害後の回復力」の3点である。

第一の危険回避の基本は、災害危険度の小さい土地に住むことである。日本に住む限り、地震や台風そのものを避けることはできない。しかし、揺れや液状化、津波、水害、土砂災害などの危険度の大きい場所を避けることはできる。一般に、標高の低い場所は、新しく堆積した地盤の場合が多く、地盤が軟弱で、揺れが強く液状化もしやすい。低地は津波・高潮や洪水危険度も高い。こういった場所は、かつての水辺に多いため、地名に水を連想する漢字が含まれていることが多い。丘陵地にも危険がある。丘陵地の宅地造成地は、山谷や斜面を削ったり埋めたりして整地するため、盛土部では揺れが強くなり、傾斜地では土砂災害が起きやすい。将来、子どもたちが下宿探し、アパート探し、新居探し、マイホームづくりをするときに、土地選びを間違えないように、危険を見抜く力を教えたい。

第二の抵抗力の基本は、堤防などのインフラの強化と、家屋の耐震化、家具固定などによる室内の安全確保である。家屋の耐震化と家具固定は個人の責任である。耐震的な家屋は、壁が多く、軽くて、バランスの良い建物である。中高層の住宅の場合は、高層階ほど揺れが強いので、家具の固定は必須である。行政に対して学校の耐震化を訴えているのに、子ども部屋の家具固定ができていない親御さ

んにときどき遭遇する。自宅に居る時間は、学校に居る時間より遙かに長い。自宅の安全確保が何より優先する。宿題として、子どもの寝ている部屋の家具の位置、家具が倒れた場合の場所を描かせてみると、室内の危険度がすぐに分かり、家具固定を誘導できる。多くの自治体には、耐震診断・耐震補強・家具固定などの助成制度がある。学校から地域ぐるみの耐震化・家具固定運動を始めたい。

第三の回復力の基本は、災害後のための事前の準備である。家族の安否や避難先の確認、水や食料の備蓄など、事前に各家庭で災害時の相談をし、十分な準備をしておけば、いち早く生活を回復できる。また、困難を乗り越える体や心を鍛えておくことも大切である。

おわりに

「為せば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり」の思いを子どもたちに伝え、学校での学びから、考える力を育み、さらに具体的な防災・減災行動へと繋げさせたい。子どもたちは巨大地震を確実に経験する。用意周到な事前準備で災害を未然に防ぎ、臨機応変な対応で災害を最小化する必要がある。さらに、災害後に逞しく回復するには、個々人の力と地域の生きる力をつけておく必要がある。東日本大震災で、三陸海岸の子どもたちは見事に津波から逃げた。防災教育の大事さを肝に銘じておきたい。